The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	CALL教室を活用したアクティブラーニング型英語授業
Author(s)	岡田, 悠佑
Citation	サイバーメディア・フォーラム. 2019, 19, p. 11-14
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/73405
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

CALL 教室を活用したアクティブラーニング型英語授業

岡田　悠佑　（大阪大学　マルチリンガル教育センター）

1．はじめに

大阪大学では 2019 年度から新しい英語カリキュラムを導入する。英語授業を対面授業と e ラーニング授業に大別し、対面授業ではアクティブラーニングの方法などを取り入れ、同じ時間、同じ空間に人が集まることに教育的意義がある授業を展開し、学生の英語力を効果的に向上させることを目指している。本稿ではその 1 つの取り組みとして筆者が実践している「プロジェクト発信型英語」授業を紹介し、CALL 教室がこうしたアクティブラーニングの手法を取り入れた英語授業の実践にいかに貢献しているのかを説きたい。

以下では、まず、アクティブラーニングを英語授業で取り入れることの必要性を明らかにし、次にプロジェクト発信型英語授業の具体的内容を概観した上で、アクティブラーニング型授業における CALL 教室の意義を説く。最後に、今後の CALL 教室の方向性を提言し、本稿のまとめとする。

2．アクティブラーニングとしてのプロジェクト発信型英語授業

いわゆる講義型授業は、既存の知識を教員から同時多数に一斉に伝搬することの効率という意味で、同じ場所そして同じ時間に多くの人数の学生を集めることの教育的意義を成している。しかし、e ラーニング教育・学習のハードルが下がった現在では、そうした一方通行の知識伝授を同じ時間同じ場所で行うことの意義は薄れていると言える。さらに、医歯薬理工系だけではなく、人文社会系であっても国際的に発信していくことが求められる現代社会において、英語は国外の情報を受信するための道具としてだけではなく、発信するための道具として効果的に用いられることが期待されている。こうした状況の下、受信の方法のみであったり発信の「方法」を一方的に伝達される講義型授業よりも、「主体的・対話的で深い学び」（文部科学省, 2016）を目指したアクティブラーニングが英語授業に取り入れられることは全く自然なことだと考えられる。

プロジェクト発信型英語授業は、学生が教室に同時間に集まりプロジェクト成果の発表と議論という「実践」を行うことで、主体的、対話的、そして協働的活動による深い学びが得られるように設計された授業で、授業内での学びの実践共同体（Lave & Wenger, 1991）への参加を通して学生一人ひとりが単なる animator ではなく author（Goffman, 1981）として英語を使用するようになることを目指したものである。学生一人ひとりが独自のテーマでプロジェクトを組み、文献調査を中心にリサーチを行い、自らの考察を加えて研究成果をまとめ、他のクラスの参加者にその成果を発表し、議論を行う。他の誰が押し付けたものではない、各自の興味関心ごとからリサーチプロジェクトを組ませ、自分の学習内容を自分で作らせることで、発表及び議論の場としての授業への参加の条件としての主体的な学びを、そしてクラス内でのプロジェクト進捗状況及び成果の発表と質疑応答を通した議論によって対話的そして協働的な学びを作り促すことを達成している。

こうしたプロジェクト発信型英語授業の 1 学期間の具体的なスケジュールは次の通りである。[1]

- 1 週目：オリエンテーション及びプレゼンテーション
  授業内容の確認とテーマ検討の開始、他者紹介による情報の受信と発信の演習）

- 2〜5 週目：中間発表へ向けたプロジェクト実習
  各自が設定した 1 つのテーマに関する英文記

[1] 現在（2018 年度）の科目名である「大学英語（リーディング）」に合わせるため、文献研究を中心としているが、本来プロジェクト発信型英語授業では文献研究以外の研究方法にも取り組ませる。

事をScientific AmericanやScienceAlertなどのオンラインニュースサイトから探し、毎週1つの記事を読み、自分の意見、考え、主張を100 words程度の英文で書き、発表資料も用意して授業に持ってくる。

- 6〜8週目：中間発表
  1つのテーマに関する2〜5週目で調べた記事に対する自分の意見・考え・主張をまとめ、その1つのテーマに関する発表を行う。

- 9〜12週目：最終発表へ向けたプロジェクト実習
  各自が設定した1つのテーマに関して、英文記事をScientific American、ScienceAlertなどのオンラインニュースサイトからさらに探し、毎週1つの記事を読み、自分の意見、考え、主張を100 words程度の英文で書き、発表資料も用意して授業に持ってくる。

- 13週目以降：最終発表
  1つのテーマに関してこれまでに調べたこと、発表したことを全てまとめ、そのテーマに関する自分の意見、考え、主張を発表する。

このようなスケジュールの下で展開されるプロジェクト発信型英語授業では、各学生が毎回のリサーチ結果をまとめた英文とパワーポイントなどのスライド資料をCLE上の掲示板に投稿するという授業外活動が何よりも重要なものとなる。授業外活動をしてこなかった学生は、授業内活動であるグループ内でのスライド資料を用いた発表と議論、そしてクラス全体へのグループ代表者の発表と質疑応答の際に発表するものがないからである。グループワークやクラス全体での発表の機会は、学生が自身のプロジェクトの内容や方向性を確認する機会であるため、授業外課題を怠ることはその学生のプロジェクトの発展に対して大きなマイナスの影響を与える。CLE上で提出を行い、時にはCLE上でもコメントを付けさせることをするので、課題未提出であることはオンライン上でも前景化させられる。こうした、いわゆるマイナスの動機づけも、1つの仕掛けとして学生の授業外課題提出につながっている。

各授業ではグループワークとクラス全体活動だけではなく、最後の10分間を使って、グループワークやクラス全体活動で行ったこと、また自身の発表やクラスメイトの発表、議論、質疑応答、教員やTAからのフィードバックから気づいたこと、学んだことをCLE上の掲示板に書き出させるリフレクションという学習活動も行っている。アクティブラーニング型授業は、何かやったようで実は何も学んでいない、ということになりがちだが、学んだことを書き出せるようにさせることで、学習項目の明示化による「気付き」（cf. Schmidt, 1990）を促している。

以上、プロジェクト発信型英語の概観を説明したが、具体的な内容については筆者のHP（https://sites.google.com/site/liloarise2690/project-based-english-teaching-at-osaka-u）にて、授業風景を撮影したものを学生の許可のもと公開している。この授業風景が示すとおり、CALL教室は、上記のように授業外活動をもとに授業内活動を実践させ学びを生起させる、プロジェクト発信型英語授業を効果的かつ効率的に行うには現在欠かせない環境である。

3. プロジェクト発信型英語授業におけるCALL教室の役割

現在のCALL教室には各学生が1台専有できるWindows機が配備されている。各Windows機の間のモニタと教室前方の大型スクリーンには教卓のWindows機の画面やHDMIまたはVGAで外部接続した機材のディスプレイ画面、また書画カメラの被写体を映すことができる。教室内のWindows機は有線でインターネットにつながっており、CLEなどへのアクセスに不具合が生じることはない。このような環境であるからこそ、プロジェクト発信型英語での授業内活動が簡単に行うことができる。グループワークとして授業外課題を発表させ議論をさせる際には、各学生がWindows機からCLEにアクセスし

そこから各自のスライド資料を再生して発表することでき、そしてクラス全体での発表と質疑応答の際には教卓の Windows 機で発表者のスライド資料を再生させれば、教室内の大型スクリーンとモニタを使ってクラス全体に発表資料を見せることができる。さらに、授業最後にリフレクションを CLE に書き込む際にも、各自の Windows 機を使うことで、スムーズに提出が行える。

図 1 CALL 教室でのグループ活動の様子

図 2 CALL 教室でのクラス全体活動の様子

もちろん CALL 教室ではない通常教室であっても学生に自分のタブレットやラップトップ、あるいはスライド資料を印刷して持参させるなどでグループワークをさせ、クラス全体でのやり取りの際にはスライド資料は授業用 PC を用いて教室のスクリーンに映す、などの工夫も可能だろう。しかし、たとえ全学生が自分のタブレットやラップトップを持参させたとしても、現在の通常教室の貧弱な無線 LAN 環境では CLE へのアクセスに不具合が生じる可能性が高く、特にリフレクションの際に支障を来すリスクがある。リフレクションを CLE に提出としなければよいだけとも考えられるが、クラスメイトの振り返りを見て気づくことも学習の 1 つであるため、誰でもが見ることができるように CLE に提出させることは重要である。英語を使っての発信と議論、そして振り返りによる学習活動に多くの時間を使えるようにするためには、インターネットへの接続トラブルや線のつなぎ直しによる余計な時間は極力ないようにしたい。学生間に所有物や環境の差によって学習機会の差が出ることを、少なくとも教室内ではないようにする。CALL 教室は平等かつ効率的な学習機会を提供するプラットフォームとしての役割を、プロジェクト発信型英語授業においては担っている。

学生 1 人ひとりが iPad を利用できる HALC 教室でも平等な学習機会は提供可能だろう。しかし、iPad Pro や Surface といったタブレットがキーボードの使用を推奨しているように、iPad のみでの作業は特に振り返り作業での効率性で劣る。QWERTY 配列の物理キーボードが備え付けられた Windows 機が各自に用意されているという、汎用的でありふれた環境である CALL 教室を使う方が、英語を使って発表し議論し、それらの活動を振り返り学ぶ、という基本的なアクティブラーニングを軸としているプロジェクト発信型英語授業にはより適切であると言える。

以上、授業内活動の効率性という意味で CALL 教室の役割を論じてきたが、機材・什器以外の CALL 教室の環境もプロジェクト発信型英語授業の実践に役立っている。それは、ある程度の大きさの箱であることである。プロジェクト発信型英語授業ではスライド資料を用いたプレゼンテーションではなく、ポスター発表を中間・最終試験として課すこともある。その際、中間・最終ではポスターセッションを行うが、CALL 教室の大きさでは壁や柱、ホワイトボードを使って、A1 サイズで 20 前後のポスターを貼り出すことができる。これは大講義室を別にして、通常教室では不可能なことである。ポスターセッションは、各学生が自らのリサーチプロジェクトを発

表する時間と質疑応答の時間を長く取ることができるというメリットがある。CALL 教室本来の使い方ではないかもしれないが、その箱としての大きさからも自由な使い方ができる環境でもある。CALL 教室は 2018 年の現在からすると目立った新しい技術のないありふれた環境かもしれないが、そうした「枯れた技術」をいかに活用するか、という視点を持ってみれば、まだまだ面白い使い方のできる技術・環境であるかもしれない。

図 3 CALL 教室でのポスターセッションの様子

4．おわりに

プロジェクト発信型英語授業は、学生が教室に同時間に集まりプロジェクト成果の発表と議論、そして振り返りというアクティブラーニングを行うことで、受講学生 1 人ひとりが発信型の英語力を身につけることを目指したものである。CALL 教室を活用することで、こうしたアクティブラーニングを通じた学生の学びが効果的かつ効率的になされている。CALL 教室は決して新しい環境ではないが、そのありふれた汎用性ゆえにアクティブラーニングといった学習活動も容易に行えるだけの懐の深さがあると言えるだろう。

近年 CALL 教室で授業をしていて目につくのは、自分のラップトップやタブレットといったデバイスを持ってきている学生数が年々増加していることである。いつか、この傾向がより強まり BYOD が当たり前となった際には CALL 教室は不要の存在とされてしまうかもしれない。たしかに、そうなった場合各自 1 台の Windows 機を揃える必要はないかもしれないが、そうした時代にも箱としての CALL 教室は必要だろう。BYOD となればまず充電が問題となるが、通常教室では各学生のデバイスを充電できるだけの電源タップを備えることは不可能だろう。例えば現在の CALL 教室であれば、Windows 機を全て取り払って代わりに電源タップを用意しておくことが可能である。また、2018 年度以降の CALL 教室では各部屋に独自の無線 LAN 環境を提供し始めており、CLE への接続も問題ないだろう。各学生がそれぞれに自分専用のデバイスを持ってくる時代であっても、こうした箱としての CALL 教室があれば、プロジェクト発信型英語のような、アクティブラーニング型の授業は効果的かつ効率的に行うことができるだろう。箱としての強みを活かした CALL 教室の活用が、将来の CALL 教室の進むべき道であると言える。

5．参考文献

文部科学省. (2016). 主体的・対話的で深い学びの実現 (「アクティブラーニング」 の視点からの授業改善について) のイメージ (案) http://www. meXt. go. jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/073/Siryo/_icsFiles/afieldfile/2016/05/31/1370946_12. pdf. 2018 年 7 月 30 日取得

Goffman, E. (1981). Forms of talk. Philadelphia: University of Pennsylvania Press.

Lave, J. & Wenger, E. (1991) Situated learning: Legitimate peripheral participation. Cambridge: Cambridge University Press.

Schmidt, R. W. (1990). The role of consciousness in second language learning1. Applied linguistics, 11, 129-158.